
システマティック臨床精神医学

4つの多角的視点による治療体系化

マーガレット・チズム、
コスタス・レケストス著
澤 明監修
成田 瑞監訳

中外医学社, A5判 154頁, 2,970円, 2024年6月刊

(岡山大学精神神経病態学) 高木 学

私は本が好きではない。国語も苦手である。翻訳本は日本語が不自然で読まない。そしてシステマティックがとても嫌い(温かみがない気がする)。私は感情や感性のまま患者さんに向き合うのが好きである(なので、教育者に向かない)。書評をお願いされなければ、恩師の澤明先生から送られた本書も開かなかったかもしれない。私が書評を書かせていただくことをお許しいただきたい。

アプローチの背後にある発想としての4つの視点(疾患:持っているもの, 特質:であること, 行動:したこと, 生活史:遭遇したこと)。正直, 納得できるが面白くない(ここで挫折してはいけない)。第2章こそ本書の醍醐味である。8症例の面接場面が詳細に描かれる。8症例は違うカテゴリーの疾患(カテゴリーは本書で批判されているが)であり, 私もよくお会いする患者さんである。システマティック(定式的)に面接することが目的ではなく, システマティックに患者を深く理解することが重要だと, 1症例ごとに理解が深まる。システマティックでありながら, 面接は患者への配慮や温かみにあふれて自然であり, システマティックがゆえに4つの視点を十分に捉えて漏らさないのだ。患者はなんと生き生

きとした人生を送っているのだろう。患者はDSMの疾患を持つ人ではなく, すべてを愛すべき人に思えるのだ。一方, 「身体愁訴を持つ患者では器質因の除外が重要」「うつ症や統合失調症など疾患が生活史, 行動, 特質に与える影響を見極める」など生物学的精神医学の要素も十分に盛り込まれている。「生活歴の障害は修正, 特質の障害は導く, 行動は介入, 疾患は薬剤治療」と解決方法まで明確に示される。まさに現代精神医学に必要な要素が症例を通じてこの本に盛り込まれている。私のように危うく食わず嫌いにならないよう, もし面白くなく難解に感じたら, 総論はざっと流し, 症例を先に読むこともお薦めしたい。

監訳の成田先生も書かれているが, 翻訳ゆえに表現の限界がありとても御苦労があったろう。しかし症例は読みやすく工夫されている。カウンセリングや精神医療が身近だからだろうか, 本書の患者は自らを表現することに長けている。自らの診察を顧みた時, 「役割の導入」「家族についての話より始め, 落ち着いてから主訴を話題にする」など, 丁寧な診察が行えていないことを猛省した。それでも, 私の勤務先はある程度システマティックな面接やカルテ記載の指導を行っている。日本の後期専攻医教育機関でシステマティックな面接やカルテ記載を指導している施設はどのぐらいあるだろうか。また, 単科精神科病院では本書の8症例中5症例の経験が難しいと思う。本書の患者が生き生きとして全人的に表現できているのは, 米国と日本の精神医学の実力差かもしれないと嫌な予感がした。日々の診療を見直す, また, 教育的な観点で本書の持つ意味は非常に大きく, 幅広い層に手に取っていただけることを願っている。

原書: Margaret S.Chisolm & Constantine G. Lyketsos: Systematic Psychiatric Evaluation: A Step-by-step guide to applying the perspectives of psychiatry